1

対処に理由はいらない

第一章は、ＡＳＤ当事者であり、ＡＳＤを持つ子どもの親として、「当事者の〝世界〟にふれる」という内容で書かせていただきました。感覚過敏を中心に、当事者である僕が日ごろ感じていることや、自分の内面について紹介してきたつもりです。

第二章では、「それを知った上で、まわりの人は実際にどのように行動すべきなのか？」を書いていきたいと思っています。「特性とその対処」がテーマです。

「すり合わせ」はいらない

自分が子どもだったころ、また親として学校とかかわるようになって、一番不要で不快に感じていたことが「すり合わせ」でした。「すり合わせ」とは、いわゆるお互いの認識の確認のこと。「いつ、どこで、誰が、なぜ、何をしたか？」を確認する作業です。

学校側からすれば、保護者に説明する上で必須の内容でしょう。たしかに説明をする際には、これ

は外せないと僕も思います。しかし、当事者にとって〝何か〟が今起きている現場において、この「すり合わせ」よりも大事なことは、当事者が「何を感じ、何を考えているのか」に気がつくことです。一方、支援者側（親・教師など）は、何が正しいかではなく、目の前にいる子どもが「何に困り、何に苦しんでいるのか」「どのような助けが必要で、どうすべきなのか」を考えることだと思います。

状況の確認や、本人の気持ちと合致しない声かけは、当事者を混乱させるのでするべきではありません。支援者としてどう行動すべきなのかを実行に移す瞬発力が大事です。

世に出るための手順

僕には極度の人見知りがあります。買いたいものがあって店に行ったのに、店員に声をかけられただけで気分が悪くなり、店から出てしまったり。親戚でも数年会っていないだけで、まるで知らない人と会うくらい緊張したり。友達でも、きょうだいでも、それは起きました。「そんなことがあるんだ！」と、僕の周囲にいる人はその事実に驚嘆します。だけど、上には上がいるわけです。

それが僕の三男。彼は、僕の三人の子どもの中で最も自閉傾向の強い子どもです。いわゆる〝普通の子〟とはまるで違いました。

三歳で受けた田中ビネー知能検査では、言語は一歳以下で判定不能。記憶と図形は六歳以上で判定不能。総合ＩＱ60。ＩＱなんていうくだらない数字に僕の三男の評価が出るわけがないことは知っていたので、そんなことは気にもしませんでしたが。ただ、でこぼこの傾向と対策を講じる上で必要なので、ＩＱの傾向はある年齢で調べるようにはしています。

三男が三歳のころ。僕はどうすれば彼が幼稚園に行けるようになるのかを考えていました。常識的ではない「人見知り」だったからです。

三歳児検診に連れて行けば、同年齢の子どもがいるのを見て、全裸で逃亡しようとした。地区センターの幼児プレイルームに連れて行こうとしたら逃亡。数日後、自転車で地区センターにつながる道を走行していたら激昂。道順を記憶していたようで、走行中の自転車から飛び降りようとしました。人様から見ればかなり強烈なものだとは思うのですが、僕的には想像もでき、まだ笑える範疇でした。

三男を幼稚園に行かせるために、僕は段階的にいくつかのステップを踏むことにしました。

①僕と三男だけにした部屋の中で、「外に行くと楽しいことがたくさんあるんだぞ」という話をする。

このとき三男は、家の外に出ることすら恐れるような子でした。その子を外に連れ出すためには、このステップは欠かせなかったと今になって思います。

②人がいない河原や野原に行く。

人がいるところでは異常に緊張する三男でしたが、僕と二人きりであればリラックスできることがわかりました。そこで、「外に出てもリラックスできる状態があること」→「外に出ることは楽しいこと」になるようにしていきました。

③人がいない公園に行く。

ステップ的にはこの後いくつかあるのですが、後述する事件はここで起きました。

その後のステップ。

④人がいない図書館に入る。

⑤老人しかいない公園に入る。
⑥三男よりも年下の子どもしかいない公園に入る。
⑦同年代の子どもがいるが、接触しないように配慮して公園に入る。
⑧同年代の子どもがいるが、基本的に接触しない環境が守られることを前提として図書館に入る。
⑨同年代の子どもがいることを確認して（あるいは後から来ることを確認して）公園に入る。
⑩同年代の子どもを対象とした体操教室に参加する。
⑪誰もいないプレイルームに入り遊び、誰か来たら即退出する。
⑫誰もいないプレイルームで遊び、他の子が来ても退出せず、本人の状況を見つつ、退出する時間を延長していく。
⑬誰かがいるプレイルームに入り、臆することなく入室し遊ぶことができるようになる。
⑭プレイルームに行くことを楽しみにしていることを確認できるようになる。

そんな手順を約二年半かけて踏み、三男は徐々に家の外に出ていく準備をすることができました。その過程にあって、僕が一番驚いたことが、三男の「人見知り」でした。

母親に「人見知り」

事件はステップ③「人がいない公園に行く」で起こりました。

三男にとっての〝人〟とは、たぶん彼自身と僕だったのかなぁと思います。二人の兄と母親が家族

でいますが、彼の中で別の何かに分類されていたとしか思えません。

「人がいない公園に行く」というステップで必要だったのは、自分と三男以外の人がいないことでした。後から誰かが来れば、僕たちが退出する。それがルールだったのですが、僕のルールを上回るものを三男は構築していました。

ある日のお昼前。

僕と三男が公園で遊んでいるときに奥さんが来ました。お昼ご飯に何を食べたいのか、買い物に行く前に確認するためでした。

奥さんが公園に入って来るなり、三男は異常な呼吸をしだしました。過呼吸です。異常な呼吸は続き、三男は痙攣を始めました。僕は奥さんに即座に公園から立ち去るように命じました。ありがたいことに奥さんは何も言わず、公園を後にしてくれました。

対処に理由はいらない

今となってはこうして理由を説明できるようになっていますが、当時はまるで理解していませんでした。

三男がしていたことはいわゆる「場所見知り・人見知り」の類です。

僕も普段仕事でレストランに通っていて、顔見知りの従業員でも、私服のときに偶然出くわすと誰だかわからなくなってしまうことがあります。また、同じ制服を着ていても、近くのコンビニなどで顔を合わせると、瞬間的に誰だかわからなくなってしまうことがあります。